

高次元経営実践勉強会

第Ⅴ期

— 「思考力」が「**人間の価値**」を不動にする —

高次元経営(信頼の組織)への パラダイムチェンジ
— 「機械論パラダイム」から「有機体システム思考」へ —

第5講

「補 講」＋「質問会」②

令和6年9月25日 撮影

講師：楠本浩之

主催：一般社団法人 日本的経営研究会

経営人間学講座 道場清規

一、経営とは、経世済民の高い志しを、実行に移すことである。

一、経営とは、人間の究極の理想と目的を、実業の現場で実現することである。

一、経営とは、人間のもつ無限にふかい可能性に、確信の信を置き、価値の創造に努めることである。

一、経営とは、人間のもつ最も醜い力を、もつとも美しい価値に、転換させることである。

一、経営とは、いかなる絶望的な境遇にあっても、その中からつねに智慧と力と勇気を、奮い起こすことである。

感想文

—自己を振り返る—

会社名: M株式会社
役職: 代表取締役社長
氏名: O
年齢: 39 歳
性別: 男性

感想文の公開: ①開放可能

【高次元経営第Ⅴ期4講 感想文】

講義 筆耕 (レジュメ P7 楠本先生)

真の自立とは、

支えることで多くの支えを得る事。

我のみによる自立など存在しない事を真に知るという事。

→「自分の力で何とかする。頼るヤツはダメ!!」ではない。

つまり、自己と環境との関係性において、真の存在を認める時、
自己と環境の関係性が変わり、結果、支えることで支えられる環境を引き起こす。
これを思想的「自立」という。

私にとって、「自立」や「依存しない」は、人生のテーマだったかと思います。
年の離れた末っ子だったから、何となしにそこに憧れがあったのかもしれませんが。
上京していくこと、バックパッカーをしたこと、モノを多くもたないようにとか、自分でコントロールできるもの集中する、コントロールできない環境を避ける、小さな組織を好む、とか、何か自分なりに「自立」に憧れがあって今の人生があるように思えます。
浅い考えで自分なりに行動をとってただけなのですが、先祖のご加護か良い出会いに恵まれ、感謝して生きることを学び、守るべきものや使命を少しずつ得ることができています。
そんな中で今、楠本先生から”「自立」とは何ぞや?”と問われたのです。
そして、自分が表面的なことしか分かってなかったことに気付かされました。
「自分の力で何とかする。」という考えに近かったな、と感じました。
全然分かってなかったけど、運よく、「真の自立」をする機会をちょうど頂けている。まさに今人生から問われているのか。それを気付かせるために楠本先生との出会いがあったの

か、そういう想いに至りました。

学生の時、先輩から頂いた書籍「夜と霧」のV・E フランクルの言葉、

「人生に問うのではない、人生から問われているのだ」との出会いも私に影響してきていて
いるのだと気付かされました。

実はちょうど、実家のことで自分が役に立てるのかもしれない時が来ています。私は恵まれていて、両親のおかげで苦勞なく生きてこられて、親が入院するような時も「心配するだろうから」といった理由で私にはあとで話があったり、常になんとか支えられる側だったのです。でも、まさに自己と環境の関係性が変わる。真の自立をする機会がちょうど今きていると思います。そのタイミングの妙に驚きと感謝しかないです。

講義 筆耕（ レジュメ P11 楠本先生 ニルス・ボーア引用 ）

- 「専門家」とは、あらゆる可能性を排除した上で、敢えて間違いを犯す人のことだ-

ニルス・ボーア

代表に就任して最初に 100 日が過ぎた今時分、就任前から掲げた方針を様々なところに落としこんでいくことに没頭しておりますが、これはせいぜい5-10年のビジョンをもとにしているようにも思えます。やっていることは間違いではないと確信しているものの、一方で、凝り固まっていること。より長期の50-100年のビジョンが不足していること。新しいことを吸収していくことが不足しているのではないか 感じているところだったので、ボーアの姿勢に感銘を受けました。

講義 筆耕（ レジュメ P12 楠本先生 ニルス・ボーア引用 ）

何度も非難を浴び・失敗を経験し、それでも諦めずに

本当に私に夢・使命を現実のものにしようとするなら、

目先～中期的なところを確実に成しながらも、「常に新しい視点」を持ち続け、継続をできる前提の中で挑戦、失敗し続ける ことも必要。むしろ自分にはそこが課題かと感じます。疑問点をそのままにしない。下手な自己保身で知ったかぶりをするのではなく、理解できるまで自分の手足を動かし、人に教えを請い、依存ではなく協力依頼の関係性をなす。

「これこれは私には関係ない、知っている、もう十分」と思いがちな自分にボーアの言葉を糧に種々の人、書籍、場所に触れていく、拡散と収束を繰り返す。やっていきます。

講義 筆耕（ レジュメ P16 楠本先生 お言葉 ）

あなたが育てた人をここに連れてきてみて下さい。Before と After をみせて。

我々は経営者として何をしているのでしょうか？

「この人と一緒に仕事をしていきたい」と思われること、これに勝るものがあるかなあ。と思いますね。思う方も思われる方も代え難い・・・。

経営理念の実現に向け 数字の目標 と 戦略、戦術 を語っていますが、
人をどれだけ育てたか？ 自分に振り返ってみて非常に耳が痛いです。

ここに目を向けないと継続発展ないのではという懸念あります。どんどんそういう世の中になるし、なるべきと感じています。

「この人と一緒に仕事をしていきたい」と思われているか？

自分に振り返ってみて非常に怖い問いかけです。

一方で「この人と一緒に仕事をしていきたい」と思える人がいることに非常に幸せを感じています。今後は 売上、利益 という軸ではなく、“人の育て や 「この人と一緒に仕事をしていきたい」と思われるか” という軸にてワクワク成長していくようにします。

講義 筆耕（ レジューメ P23 竹内日祥上人 2012 年 第 8 講 経営人間学講座 ）

「私はあなたと結婚して、自分の健康がこんなに大事だって初めて気が付いたよ。というのはあなたを悲しませたくないからだ。私は元気でいなければいけない。朝起きるたびに、それを私はいつも思っているのだ。」

前回伺ったときもこの言葉が引っ掛かり、そして今回も引っ掛かりました。

まだそのまま言えてないですが、戸籍上の夫婦という扱い や 自己 よりも大切なのは関係性である。関係性を成すのは私の行動であるので、感謝の言葉を口に出す。ようにします。

講義 筆耕（ レジューメ P37 楠本先生 ）

インテリというのはその経験がないとインテリではありません。
つまり自己を知るということがインテリなのです。

百聞は一見に如かず とか 現場主義とか

とにかく今の自分は動かないといけないと思いました。その動きが非平衡 動的秩序とな
って会社、国家、世界の継続繁栄に繋がると思ってやります。

以上

ただいま、質問はございません。

参考資料

「夜と霧」

ヴィクトール・E・フランクル

オーストリア／1946 年

1939 年 ナチスドイツがポーランドを侵攻して始まった第二次世界大戦を発端に、古くから根付いていた「反ユダヤ主義」という偏見を、国家主導で扇動し実行されたホロコーストによって、ナチスとその同盟国は約 800 万人のユダヤ人を虐殺しました。

本書は「ユダヤ人」という理由だけでナチスに捕らえられ、過酷な強制収容所の生活を余儀なくされたフランクルのリアルな観察眼によって、極限状態に置かれた人間の「精神」や「行動」の移り変わり、そして、「絶望」や「希望」を見出す過程を記した生還後の記録です。

日本語版のタイトルとして親しまれている「夜と霧」とは、夜の霧に紛れて各地で相次いだユダヤ人一家の失踪事件を 1941 年から秘密裏に実行していた、アドルフ・ヒトラーによる特別命令から由来しています。

主な登場人物は 4 人。①ウィーンの精神病院に勤め、未完の原稿を執筆中に強制収容所送りとなったユダヤ人医師フランクルと、②アウシュヴィッツ到着から終戦による解放に至るまでの約半年間の収容体験で彼が出会った同じ囚人仲間。③収容所内で絶対的な権限を持ち、彼ら被収容者を監視するナチス親衛隊の将校達。そして、④わずか結婚 9 ヶ月でナチスに捕らえられて生き別れとなり、別の収容所で亡くなった妻のティリーです。

人生で失意の底に陥った時にこそ、「誰のための苦悩」であり、「何のための苦悩」であるかを、徹底的に悩みぬけば、そこから自ずと「新たな道」が開かれ、我々は「生きる意義」を見出すことができる、とフランクルは語ります。

【夜と霧】本編

① 収容所送り

故郷オーストリアのウィーンで家族と暮らす、当時 36 歳だったフランクルは、1941 年のある朝、「ユダヤ人狩り」を行っていたナチス当局からの通達により軍司令部への出頭を命

じられます。ドイツ周辺ではひそかに、第二次世界大戦の勃発に先立つ 1933 年頃から「ユダヤ人狩り」が遂行されており、宣戦布告時には、ドイツ国内で 6 つの収容所がありました。それに加え、その後 2 年間でポーランドやオーストリアなどの占領国にも新たな収容所が建設されました。これらの収容所に、老若男女を問わず 1200 万人以上のユダヤ人が連行され、800 万人を死に至らしめました。

収容所内部で行われていた実態は、軍によって機密事項とされていましたが、その噂が少しずつ外部に漏れるようになり、ユダヤ人達は「明日は我が身」と息をひそめて生活していました。

ウィーンにある精神病院の勤務から独立して、精神科の個人病院を始めたばかりのフランクルにも、出頭命令が下り、「ついにその日が来た…」と、覚悟を決めましたが、接見したナチスドイツの国家機密警察「ゲシュタポ」に、神経症や恐怖症について話すうちに、思いがけず関心を持たれるようになり、収容所への拘留に 1 年延期の執行猶予が与えられ、ゲシュタポの統治下に置かれたユダヤ人病院の精神科での勤務が許されました。

いずれ下るであろう収容所送りの日を迎えるまでに、医者として、自分が積み上げてきた実例を伴う理論をまとめるべく、現行の執筆にとりかかります。収容所に入れられたら最後、命の補償はありません。自分が生きてきた証を残したかったのです。ある伝手によって、アメリカに亡命できるビザを入手しましたが、悩んだ挙句、フランクルは家族とともにウィーンに留まることを選びました。

そして、原稿の完成を目前にした翌 1942 年 9 月、ついにその日は訪れます。捕らえられたフランクルは、両親、そして結婚してまだ 9 ヶ月の妻とともに、チェコスロバキアの収容所（テレージエンシュタット収容所）に送られます。父親はまもなく所内で餓死し、フランクルはそこで 2 年拘留された後、あの悪名高きアウシュヴィッツ強制収容所へ送られることになりました。工場で働いていた妻は、アウシュヴィッツへの移送を免除されていたにも関わらず、フランクルに同行することを決意します。

夫婦は 1944 年 10 月、貨物列車でアウシュヴィッツに移送されました。到着から数日後、フランクルは、ドイツのバイエルン地方にある別の収容所（ダッハウ収容所）へ送られることになり、アウシュヴィッツで生き別れた妻は、その後ベルゲン＝ベルゼン収容所でイギリス軍による解放直後に亡くなったそうです。母親と兄はアウシュヴィッツで死に、フランクルの大切な家族は収容所によって命を奪われてしまったのです。

② 最初の選抜

フランクは「絶滅収容所」として格別に恐れられたアウシュヴィッツで、最後まで生き残った数少ない収容者でした。その要因として「**最初の選抜**」で、幸運にも命を拾われ、アウシュヴィッツ収容所での拘留機関が短かったこと、その数日後に、ドイツ南部のダッハウ強制収容所の支所に移されたこと、さらに、発疹チフスの病人収容所であるティルクハイムへ移動となり、そこで終戦を迎えたことも挙げられます。その端を発する、貨車に詰められたフランク達ユダヤ人が、アウシュヴィッツの大きな停車場に到着する場面に遡ります。

行先を知らされず運ばれてきた車内から「駅の看板がある…アウシュヴィッツだ!」という叫びが上がった瞬間、不安に苛まれていたフランク達を震え上がらせます。

そこは、各地から集められたユダヤ人が、金品を奪われ、銃殺、あるいはガス室で大量虐殺が行われたり、飲まず食わずで強制労働させられたり、また、想像を絶する人体実験が行われていた、悪名高い場所だったからです。

連行されてきたフランク達は貨車から降ろされると、男女別々に並ばされた長い列の先で、ナチス親衛隊の将校が、無関心な様子で人差し指を左右に動かし、怯える人々を順番に選別していました。大半の人は、右へ向かうように指示されましたが、フランクの番になると、将校は少し考えてから数少ない左側に向かうよう指示します。そして、財産、所持品はおろか、上着の裏に隠し持っていた完成間近の大切な原稿さえも、あえなく没収され、身ぐるみをはがされ、すべての体毛を剃り落とされたフランクは、鞭で追い立てられて整列する裸の人々と共にシャワー室へ入れられます。シャワーノズルから出てきたのが、おぞましい毒ガスではなく本物の水だったことに歓喜しましたが、冬を迎える厳しい寒さの中、ずぶ濡れのまま、屋外に立たされました。そして「ヴィクトール・フランク」という彼の名は剥奪され、縞模様の服と、「119104」という番号だけを与えられたのです。

その日の夕方、フランクが「別の側に振り分けられた私の友人や同僚を、所内で見かけないが、どこに行ったのだろうか?」と、ある古参の囚人に尋ねます。彼は少し離れた煙突の煙を指して答えます。「あそこだよ。君の友人は天に向かっているところだ」つまり、フランクは「労働者」として選別され、命拾いをしたのです。

③ 態度の自由

数日後、フランクはアウシュヴィッツからダッハウ収容所の支所へと移送されますが、そこもまた、辛い強制労働や飢え、拷問、人体実験、伝染病が蔓延る、この世の地獄絵図そのものでした。

それでも、凍える季節に寝具が無くても風邪をひかず、糞尿にまみれた場所でも平気で眠る事ができる、どんな環境に陥っても次第に適応していく人間の生命力に驚かされます。同時に収容される多くの人達が、極限状態に置かれた凄惨な現実から目を背ける為に「無感覚」・「無感動」・「無関心」な精神状態へと変化しました。

次第にフランクは監視役からの理不尽な暴力を受けている人を見ても、朝、仲間が死んでいようとも、ただ眺めているだけで何の感情も起こらず、生きる希望すら放棄する人々を目にするようになります。

点呼の時間になってもベッドから起き上がれなくなってしまう人、食料と交換できる貴重な煙草を吸いつくしてしまう人、時には命を奪われる前に、自ら高圧電流の鉄条網に飛び込み自殺する人、さらに「数ヶ月後のクリスマスには休暇が出て、家に帰れる」という、根も葉もないわさに一縷の望みを託すも、クリスマス当日に期待を裏切られるや絶望し、力尽きた死者が数多く出たこともありました。

一方で、生き残ったわずかな人々には見失うことのない目的がありました。

フランク自身も、これまで臨床活動で目にしてきた病に苦しむ人々を救う為に、アウシュヴィッツ到着時に奪い取られた完成間近の原稿を、もう一度最後まで書き上げて出版するという使命感を失わずにいたのです。彼は過酷な収容所生活の中、寝る時間も惜しんで、ひそかに手に入れた、小さな紙きれを埋め尽くすように文字を綴って原稿を復元していきました。

過酷な状況にあってもなお、人に「生きる力」を与えるのは肉体の屈強さでも、世渡りの上手さでもなく、あくまで個人がとる精神的な態度だったのです。

死にゆく仲間のパンや靴を奪い取る人間がいた一方で、自らが餓死寸前の状態にありながら、仲間にパンを与え励ましの言葉をかける者がいたこと、そしてわずかな食事休憩の間でも神に祈りを捧げたり、音楽やユーモアに慣れ親しむ人々、恐ろしい現実世界から、内面の豊かさへと逃れる道が開かれていた彼らこそ、過酷な収容所生活をより良く生き延びる事ができました。

フランクは、人間がどこまでも「時間的な存在」であり、未来に希望を持つことで精神的な支えを得る生き物なのだ、と痛感するのです。

「与えられた事態に対して、どういう態度をとるかは誰にも奪えない、人間の最後の自由なのだ」と。

④ 「目的(目標)」を持つ命

収容所において、人ひとりの命の価値は徹底的に貶められました。

いつ解放されるとも知れず重労働を課せられる日々、水としか思えないスープとわずかなパンの配給、悪夢にうなされる就寝から目覚めた現実の苦難。

この生命の危機に追い詰められた状況で、主体性を失っていった被収容者達は、保身のために自分個人を消し、追い立てられた羊のように群れの中へ紛れ込もうとしました。そして、仲間と苦しみを共有する一方で、この耐え難い強制的な集団からほんの一時でも逃れたいという孤独への渴望が、度々沸き起こります。収容所では自らの手で命を絶つ者も多く、自殺しようとしている人を見かけても助けてはいけないというルールさえありました。

そんなある日、自殺を図ろうとしている二人の仲間が「もう人生に何も期待できない」と、フランクフルに相談します。生きる苦しみから逃れようとする彼らに対し、フランクフルは「どこかで誰かが、あなたを待っているのではないですか？あるいは、まだ実現できていないや
り残したことはありませんか？よく探してください。あなたを必要としている誰かが、何かがあるはずです」と問いかけました。

すると二人はしばらく考え、一人が「外国にいる子供が自分を待っている」科学者だったもう一人は「書きかけの本が完成するまでは死にきれない」と答えました。「自分を待っている何か」がまだ、この世に残されていると気づいて、二人は自殺を思い止まることができたのです。

「人生に、何を期待できるか、が問題なのではなく、むしろ人生が、私達に何を期待しているかが問題なのである。」

人は自分を、「待っている、何かに責任を意識する」と、決して命を放棄できないのです。

⑤ 美しい大自然

「カポー」と呼ばれる、フランクフル達と同じユダヤ人の被収容者でありながら、見張り役として監視兵と同等の特権を与えられた囚人達が、時として、ナチスの親衛隊員よりも厳しく被収容者達を迫害しました。被収容者の中から、その適性を見込まれた者がカポーとなり、協力を拒めばすぐに解任されます。仲間達が空腹で苦しみ、餓死していても、このエリート囚人であるカポー達の栄養状態は、悪いどころか、今までの人生で一番良い思いをしている者までいました。

この少数派の特権者達は、虐げられている大多数の仲間からの妬みや恨みを「出世の証」だと捉え、その幼稚な劣等感を埋めるかのようにフランクフル達から物を奪い、また暴力を振

るっていました。

こうした残酷な生存競争の中、フランクは自身を取り巻く現実から目をそむけ、平穏だった過去の思い出を振り返るうちに、胸を締め付けられて涙することもありました。

ある日の夕方、労働に疲れ果て、土の床に倒れていたフランク達の前に、外から囚人が駆けつけてきて言いました。「おい見てみろ！疲れていようが、寒かろうが、とにかく出てこい！」フランク達が渋々、外の点呼場に出て、目にしたのは、地平性いっばいに赤々と広がるあまりにも見事な夕焼けでした。

「世界はどうしてこんなに美しいんだ」

自分達の状況とは関係なく存在する美しい自然を眺めながら、彼らは辛い収容所暮らしを一瞬でも忘れる事ができたのです。

「私が経験したことは、この世のどんな力も奪えない」

「どんな状況も二度と繰り返されない」

⑥ 妻の面影

戦火の前線が近づくにつれて脱走する機会が増えると、収容所の外にある病棟で医療に携わっていた仲間が、脱走を企てます。フランクは悩んだ末、仲間からの誘いを辞退しました。今まで通り、患者のもとに残る、と決心した途端、心の奥でくすぶっていた疾^{やま}しさが嘘のように消えたからです。

極寒の早朝、身を切り裂く風が薄着のフランク達に吹き付ける作業場への行進。誰も口を利かない中、フランクの隣にいた男がこう呟きました。「なあ…もし女房が今の俺達の姿を見たら、どう思うかな…」皆が重い沈黙で妻に想いを寄せる中、フランクは朝焼けの空を見上げながら**不思議な体験**をします。

彼の精神が作り上げた生き生きとした妻の面影と語り合ったのです。ここにはいないはずの彼女が話す言葉を聴き、その微笑み、そしてフランクを励まし、勇気づけるそのまなざしが、絶望の果てにいた彼に、光を照らしたのです。もしかしたら他の収容所で死んでいるかもしれない、消息不明の妻。ただ、自分が本当に愛した人と、深く触れ合う事ができた、その一瞬の体験が心に刻まれたなら、人生は豊かに満たされ、その記憶を支えにして生きていくことができる。フランクは、そう実感しました。

⑦ 勇敢な人々

収容所の監視者側であろうと、囚人側であろうと、ごく少数ながら勇敢で、プライドを保ち、無私無欲の精神を持ち続けた人達がいました。

私利私欲を満たそうとする群れの一人とならず、厳しい運命の中で、自分自身の品格を発揮する機会を活かした人々です。

フランクが最後に送られたダッハウ収容所の支所で、所長を務めていたナチスの親衛隊員は、病気で苦しむ被収容者のために自分の所持金から、かなりの身銭を切って、近くの町の薬局から薬品を買って来させていました。後日、ドイツ軍の敗退で収容所が解放された時、ユダヤ人の被収容者達は「この指揮官の髪の毛一本触れないと言う条件でしか引き渡さない」と申し入れて、アメリカ軍から彼を庇ったのです。アメリカ軍は、約束することを公式に宣誓し、改めて収容所長に任命されたそのナチスの将校は、フランク達の食料を調達し、近隣の村人から衣類を取り寄せました。

また、チフスを患い、数日の余命しかない事を知っていた若い女性は、収容所で医療現場を任されていたフランクにこう語りました。

「以前、甘やかされて、何不自由なく暮らしていたとき、内面性を深めるなんてことを真面目に考えませんでした。今は、これほどの苦難に導いてくれた運命に感謝しています」

そして彼女は晴れやかに、窓の外で花を咲かせているマロニエの木を指さして言いました。

「あの木が、孤独な私の唯一の友達なのです。私が話しかけると、木はこう答えてくれます。『私はここにいる。私は永遠の命だ』と。」

⑧ 解放

ある夕方、飢えに苦しんだ被収容者の一人が、食糧庫のジャガイモを盗む事件が起こりました。収容所側は侵入者の引き渡しを要求し、拒否すれば、全員に丸一日の絶食を課すと告げました。2500 名の囚人達は、一切口を割らず、一日食事抜きの大連帯責任を選びますが、運悪くこの日に停電が起こり、全員の苛立ちはピークに達します。居住棟の班長は精神科医のフランクを指名し、「精神が崩壊して命を落としてしまう仲間を、これ以上増やすわけにいかない。次の犠牲者が出るのを未然に防ぐ提案を、皆に話してもらえないか？」と願い出ます。

フランクは、真っ暗闇の中で横たわる仲間達に向かって、こう語りました。

「生存率は極めて低いが、私は希望を捨てて投げやりになる気はない。なぜなら、誰も未来について、次の瞬間に何が起こるかさえもわからないからだ。未来は未定であり、明日戦況が一変するなんて期待はできないにしろ、個人的な運が突然舞い降りる事は、収容所で何度も経験している。あなたが経験したことはこの世のどんな力も奪えない。私達が苦しんだ事、やり遂げた事は過去となり、心の宝物として、永遠に保存されるからだ。どんな状況であっても、人生には意味がある。私達を見守っている誰かを失望させないために、惨めに苦しまず、誇りを持って困難に向き合って欲しい。この苦しみは、愛する人を苦しませないための犠牲として、深い意味を持つのだ。」

やがて、バラックの梁に明かりが灯されると語り終えたフランクルのもとに、目に涙をためながら、よろめき近づいてくるみすばらしい仲間達の姿がありました。

それから数日後の朝、収容所の正門には、白旗が翻り、ようやく解放される日を迎えます。しかし、長きに及ぶ極度の緊張を強いられてきたフランクルを含む被収容者達は、なぜか自由を得た喜びを実感できず、ただ怯えた様子であたりを見回しながら疲れた足を引きずり、収容所から外の世界へ出て行きました。監視兵達はいつの間にか軍服を脱いで手際よく平服に着替えており、フランクルに煙草を差し出す者もいます。開放された仲間達が経験したのは、非現実な収容所暮らしから、変わり果てた元の生活圏に引き戻された不満と失意でした。強制的に痛めつけられた彼らの中には、人格を損ない、あれほど夢見た故郷での生活にどうしても馴染めないという後遺症に苛まれる者もありました。そして、帰りを待っていてくれると信じた家族が、誰一人、玄関のドアを開けて彼らを迎えてくれることはなかった…。

— YouTube 文学ミュージアム「知っておきたい名著」より —

筆耕及びまとめ: Kアライアンス 石上美華

【衝撃の真実】夜と霧 | フランクル

自分の人生を肯定できないあなたへ ～絶望的な世界を生き抜く唯一の思想～

ヴィクトール・フランクルは【生きる意味】を見失ってしまった人を救出してくれる精神科のドクターであり、心理学の専門家はよくご存知の人です。そして、アドラー、フロイト、ユング、彼らは世界3大心理学者と呼ばれていますが、フランクルはそこに続く第4の巨頭と言われる人物になります。そんな彼が第二次世界大戦中ナチスによって捕らえられ、強制収容所に入れられたときの体験に基づいて書かれたものです。

ちなみに、このタイトルの『夜と霧』と言うのは、ヒトラーによって発せられた作戦名で、自分たちに敵対する者を捕まえる時、まるで夜と霧の中にヒソソリと跡形もなく消え去るように連行されることから名付けられていました。ただ、この作品は、収容所の中の恐ろしさや戦争の悲惨さを訴えることを目的に書かれた本ではありません。

絶望の極致に置かれた人間たちのメンタルに焦点が当てられた作品です。

収容所という受け入れがたい理不尽な環境の中で、人々の心はどのような変化をして、どのようなことに苦しんでいたのか、また何を心の支えとし、どんな考えを持って未来に希望を見出そうとしたのか、『夜と霧』は、今まさに知っておきたい生き方のヒントが多く含まれている。その意図でヴィクトール・フランクルは書いたものです。

途轍もなく重たい内容でありながら、我々人間の心を軽くするという、誠に不思議な内容でできています。

このヴィクトール・フランクル《人間の生きる意味を問いつけたユダヤ人の精神科医》は**ロゴセラピー**と言う心理療法を開発した人です。

ロゴセラピーとは、自分の生きる意味を実感できず毎日虚しい、苦しいといった感情を持った人に対して、生きる意味を見つけ出すサポートをする。そういった心理療法のことを指します。

実際彼は、このロゴセラピーを実践し、人生に絶望した人々の心の救済に、生涯を捧げ1997年の92歳の時に天寿を全うしました。あのマザーテレサからノーベル平和賞の推薦を受けたこともあるほど、世のため人のために尽くし続けた、それがヴィクトール・フランクルです。ただそんな彼が強制収容所に入れられてしまうと言う、なかなか信じがたい

事実です。

何が一番精神的にきつかったのか？

それは『期日』が無かったこと。終わりの日が見えない。出口が分からないこと。
収容所という極端に活動が制限された環境の中で、無限の時間を感じるのは並大抵のことではない。そして、そんな中「もうすぐ戦争が終わるらしいよ」「後6週間で出れるらしいよ」と言っただろんな噂が流れたり、又それが引き伸ばされたり、裏切られたりといった収容所の中での収束時期について様々な情報が流れ、期待と幻滅の無限ループに置かれると人間はやがて心が壊れてくる。と、フランクはそう言っています。そしてまた彼は次のように語り始めます。

『1944年のクリスマス、そして1945年の新年、この間に未だかつてない大量の死亡者が出た。強制収容所にいた医者によると、それは過酷な労働条件や、悪化した栄養状態、あるいは伝染病では説明がつくものではなかったそうだ。むしろその原因とは、囚人たちがクリスマスや新年にはきっと状況も良くなって家に帰れるだろうと素朴な希望(期待)に身を寄せたからなのだ。もうすぐクリスマスだと言うのに収容所から流れてくるニュースと言えはいつも暗い話ばかりで明るい記事など一切無かった。そうやって囚人達はどんどん失望し落胆し、そして抵抗力を落として行っただのだ。凄まじい収容所生活において自分の内側に在る抵抗力を落とすことは、そのまま命を落とす事に繋がる。だから自分たちの(内側の)抵抗力が落ちないように、どうにか気持ちだけは維持しなければならない。その為には【自分は何としても生き延びなければならない】という【人生の目的意識】が必要だったのだ。』

どんな人間にも苦しい時や、耐え難い辛い時がある。その時それに見合うだけの生きる意味・目的が必要となる。耐える意味、頑張り通せる意義、それが無ければ苦しさや辛さに耐えられず心が折れてしまうのです。

好きな仕事だから辛かったけど耐えられた、頑張り！と応援してくれる仲間がいたから苦しかったけど頑張れた。皆さんにもそんなご経験があるのではないのでしょうか？ただ、心

が崩壊してしまった四人たちはどれだけ励ましても、どれだけ慰めても、何も言葉を受け取らなくなってしまったと言います。そして、こんな未来に期待のできない人生を、何故生きなきゃいけないんだ！生きていたって意味が無いじゃないか！と口にするようになってくる。

では、こういった状態に陥ってしまったら一体どうすれば良いのでしょうか？

この問いに対し、フランクは本書で見事な回答を提示してくれています。

【人生からの問いかけに対して「行動」で応えるのです】

【これからの先の未来で一体何が期待できるんだろう？自分の生きてる意味ってなんだろう？そうやって自分の人生に問いを投げるのは、実は正しい態度ではない。】

寧ろ、私たちが、人生から『君はこれからどうするんだ』と期待され、問われているんだ。人生は私達に、毎日、様々な問いを投げかけてくる。そして、そのたびに私たちはその問いに対して、口先ではなく行動によって答えなければならない。

生きると言う事は、自分に課せられた使命に対し責任を持って全うすることなのだ。

人生から要求される事は、人によって異なるし、その瞬間によって変化もする。

だから、人生にどんな意味があるだろうと、どれほど考えようが、答えなど見つかりはしない。人生からの問い掛け、すなわち運命とは、決して漠然としたものではなく、常に具体的状況となって私達の目の前に現れる。

そしてその度に『さあ～君はどう行動する？』と問い掛けられているのだ。

従って今、正に、苦しみという課題が与えられているのならば、そこに対して、人間は運命を見出さなければならない。

私たちは、自分以外の誰かの苦しみを背負うことはできない。

その運命を授かった本人が、その苦しみを背負い、担わなければならない。しかし、その苦しみの中にこそ、本人だけにしか達成できない、唯一無二の業績があるのだ。

こんな事を聞くと、なんと現実離れをした考え方だと思うかもしれない。

しかしこの考え方は、地獄のような強制収容所の生活において、【我々を絶望させない、唯一の思想だったのだ】

つまり、

「自分の人生に意義を見出せずに苦しい」そういう時は、その考え方を、くるりと反転させて、人間の方が逆に人生から問われている存在である。と思考を切り替えてください。ということ。

また、苦しみの中に運命を見出せ！という力強い言葉も、彼が人生と言うものに対して

【絶対に肯定する】という、ゆるぎないスタンスをとっているのが伺えます。**(確信)**

そして فرانクル は、人生における重要なもう一つの考え方をこの本で伝えてくれています。それは、これから先の**【未来に自分を待っていてくれる存在を意識すること】**この待っていてくれる存在というのは、人でも、モノでも、コトでも、何でもオッケーです。ある人はいずれ巡り会う運命のパートナーや、自分の子供や、孫かもしれませんし、またある人は一生涯誇りを持って打ち込める仕事、あるいは趣味かもしれません。つまり未来に待っている存在と言うのは、人それぞれ違うのです。そしてその未来の世界は、自分がやってくるのを期待しながら待っていてくれる。そうやって自分をまず何かの存在に意識を向け**未来に責任**を感じていれば、人は絶対に自分の命を自ら諦めたりはしない。だから、今この瞬間を乗り越えてください。我々は人生に試されているんです。とフランクルは説いたのです。

【ブーヘンヴァルトの歌】

ブーヘンヴァルトというのは、ドイツの強制収容所の名前でフランクルの居たダッハウ強制収容所から 400 キロメートル離れた収容所で、そこにいた収容人たちが歌った行進曲です。

『ブーヘンヴァルトよ、私はお前を忘れることができない。お前は私の運命だったのだ。お前から去った者だけが分かる自由がどれほど素晴らしいか。ブーヘンヴァルトよ、私は嘆いたり、悲しんだりはしない。私たちの運命がいかなるものであろうとも、私たちはそれでも人生にイエスと言おう。何故ならその日はいつか来るから。私たちが自由になる日が、私たちはそれでも人生にイエスと言おう。なぜならその日はいつか来るから。』

先ほどフランクフルは【苦しみ】と言う課題を運命として捉えましょう。そこに自分だけの業績を見出しましょう。何故なら、この考え方こそが強制収容所のような環境でも、人間を唯一絶望させない思想であった。と言っている。そんな中ブーヘンヴァルトの囚人達はどうしようもない状況下であっても、「**私たちはそれでも人生にイエス**」と自分たちの運命を受け入れ、肯定し、自由になれる日が我々を待っているのだと叫び続けたのです。つまり、どんなに苦しい人生、どんなに辛い人生であっても全て人生からの問いかけであると説くフランクフルの思想を、ブーヘンヴァルトの歌は見事に表現しているといえます。そしてフランクフルは1945年4月ついに収容所から解放され9月に終戦を迎えます。その後、彼はわずか9日間でこの『夜と霧』を書き終え、世界に衝撃を与えました。さらに自身の収容所体験について世界中で講演を行い、人生の意味を見出せずに嘆いている人に勇気を与え続け、その講演録は後に書籍となり『夜と霧』に次ぐ彼の代表作として世界中で読み継がれる事となる。

その本のタイトルはブーヘンヴァルトの歌から取った【**それでも人生にイエスと言おう**】となりました。

ニーチェ【生の肯定】との関係

ニーチェは人生の意義を見出せなくなってしまう状態のことをニヒリズムと呼びました。そしてそれを克服するために「超人思想」や「永遠回帰」いった概念を持ち出したわけですが、正にフランクフルは極限状態でそれを**体験した人**と言えます。『夜と霧』の中では何度かニーチェの言葉を引用するシーンがあるので、おそらく思想的影響も受けているものと思われます。

【衝撃の真実】夜と霧 | フランクフル

自分の人生を肯定できないあなたへ ～絶望的な世界を生き抜く唯一の思想～

YouTube アバタロー より

フランクフル

必要なものは、生きる意味についての問いを 180 度方向転換することだ。

私たちが生きることから、何を期待するかではなく、むしろ、ひたすら生きることが、私たちに何を期待しているかが問題なのだ。

およそ、生きることそのものに意味があるとすれば、苦しむことにも意味があるはずだ。

家では誰も私たちを待っていてはくれませんでした。唯一、私を待っていたのは、“誰が”ではなく“何か”でした。

それは、(私の場合)ロゴセラピーの本を書くことです。

若い頃からの疑問。

人はいつか必ず死ぬ。

それならば、生きることには何の意味があるのだろうか。

質 問 “死ぬのは怖いですか?”

フランクフル “怖くはありません。

本当に怖いのは「生きなかった」ことです。

つまり、大きな意味で正しいことや、大切なことをする機会(人生に於いて)を十分に生かさなかったとしたら、深い悲しみを感じると思います。

しかし、自分に対して「(自分の成し得ることの)多くのことを成し遂げることが出来た」と思えるならば、これほど素晴らしいことはありません。”

今を大事にした → 砂時計

今、何を(どの砂を)落とすのか?

今、どのような行動(選択)をするのか?



人間に生まれつき備わっているもの、それは「**意味への意志**」です。

さらに「究極の意味」を知りたいという意志や欲求も存在します。 by フランクル

— NHK「こころの時代」の【解説】より—

彼は、人に起こることは全て「**人間を超越した存在**」の力に動かされている、と感じ、それを「**究極の意味**」と名付けました。

人間がどういう民族に属しているか、どういう時代に生きたか

それは全く関係ない。

「**普遍性を持った価値観**」というもの、それがどんな人間とも共有できるという考え方。

人類全部同じなんだ。世界というのは1つの人類で出来ている。

「Morantropisumus」

「1つの人類主義」 フランクルが創った言葉

NHK「こころの時代―「夜と霧」より」

フランクルの孫：アレクサンダー・ヴェゼリー

祖父フランクルは「アレックス、また収容所の夢を見た」と言っていました。

彼は、人生は苦悩と切り離せないことを、よくわかっていました。

「誰にでも、それぞれの“アウシュヴィッツ”があり、

簡単には解決できない苦しみがある」

「それは、本人にとっては絶望的な状況なんだ」と言っていました。

フランクの直弟子：エリザベート・ルーカス

ロゴセラピーは、世界との向き合い方であり、苦悩への対症療法としても大いに役立ちます。ロゴセラピーは、他者との間に摩擦が生じた時や、家庭、育児の問題など、医療分野以外にも応用できるのです。

フランクル博士は言いました「人間とは、常に決定する存在であり、自分が次の瞬間、どうあろうとするかを、自分で決められる」と。

もちろん、私たちが選択権を持たない大きな領域はあります。

しかし、一方で、小さくとも自由な選択ができる領域も確かに存在するのです。

ですから、自分の力が及ばないことを批判するのではなく、自由な領域に目を向けて欲しい。そこでの選択権は、自分にあるのです。

無論、危機は至るところにあります。

でも、

あなたにも身近でできる事は、ありませんか？

物事が良くなるため、平和のためにできる事は？

その平和は、

隣人や、パートナー、子供との間のものでも良いのです。

世界の戦争について文句を言い騒ぎ立てる前に、まずはあなたの家のリビングで、
あるいは友人や親しい人のつながりの中で、平和を築きましょう。
平和は自分の身近なところから始まり、それがいずれは世界に…

ロゴセラピーには「平和を作る能力」に関する優れた考え方がたくさんあります。
例えば、平和には「英雄」が必要です。その英雄は、女性でも男性でも構いません。
ここで言う英雄とは、戦争で敵を倒して奉られる人ではありません。

あなたです。

1997年9月2日 フランクルは、92年の生涯を閉じました。

ウィーン中央墓地にて
フランクルの孫：アレクサンダー・ヴェゼリー

祖父は、いつも人々を気にかけていました。

だから私は、

彼は、この墓に縛られてはいないと思います。

ヴィクトール・フランクルは、

今この瞬間も、

大きな世界の、どこかにいるのでしょう。

年齢：42
性別：男性

感想文の公開：②匿名希望

【高次元経営第5期4講 感想文】

第4講の感想文を提出させていただきます。

今回初めて現地で参加させていただきました。

動画で見るのとは全く違い、楠本先生の熱や圧を直接肌で感じることができ率直に参加できて良かったと感じました。

難しい体調の中現地で開催していただき本当にありがとうございました。

真の自立とはなんですか？

これまでの私は『自分のことは自分で』他者に頼らずに事を成せるという事が自立であると思っていました。

『我のみによる自立などは存在しないことを真に知る事を言う。』

これはいったいどう言う事なのか、なぜ『支えることで支えられる環境を惹き起こすことが思想的自立』という今まで当たり前と考えてきていた自立とは矛盾しているように感じられることが『思想的自立』となるのか理解が追いつかず思考が停止してしまいました。

講義終了後、配信動画を拝聴し改めて自分の事を振り返ってみると

私の考える自立とは、自分の世界に閉じこもったものであったように感じます。

自分の価値観の中で優先順位や善悪、可能不可能といった線を引きその上で独りよがりに行動を起こし自立した大人であるかのように勘違いをしていました。

家庭や仕事において、一定の役割を果たしていれば何も問題はない。

自分の範囲を勝手に決め、それに該当しない事に家族や社内メンバーが悩んでいても積極的に関わり解決を目指すことが少なかったように思います。

それでいて自分に起こった問題には誰かが手を差し伸べてくれる事を願い、思い通りにいかないと誰かのせいにする。

なんと自分に都合のいい自分勝手な人間であったのかと情けなくて申し訳なくて文字にすることが苦痛で仕方ありませんでした。

このままではいけない。

何かを変えたい。変えないといけない。

まず何から変えていけるだろうか、どういう私になりたいか。

どうしたら関わりあう方々と良い関係性を築いていくことが出来るだろうか。

思えば私は他者から何か手を差し伸べられる時に心のどこかで

『～してもらうのはあたりまえ』のように感じていました。

そこに心からの感謝も喜びもなく、口先だけの感謝を伝える事ばかりでした。

自分の周りにいる方々に依存していながら、傲慢に生きてきていたのです。

これでは真の自立もよりよい関係性の構築も叶いません。

何から変えていけるのかは分かりませんが、私自身に関わって下さる方々への感謝と喜びを日々感じて言葉にするように心掛けていきたいと思います。

ここからの赤い字は、
楠本が、本当は講義にて、
皆さまに直接お伝えしたかった事のメモです。
このメモから、お伝えしたい内容は多くあったと思いますが、
メモをそのまま掲載させて頂きました。
そのおつもりで取り組んで頂けたら幸いです。
講義中、体力が持たず、大変失礼致しました。

会社名：H 事務所
役職：代表社員
氏名：H
年齢：49 歳
性別：男性

感想文の公開：①開放可能

【高次元経営第5期4講 感想文】

命がけのギリギリのところをいらっしゃるにもかかわらず、熱のこもったご講義を賜りまして、誠にありがとうございました。

エルガーラの1階ロビーで代表にお会いした時は、驚いてその場から早く逃げようと・・・、代表がヨガマットをお持ちで手がふさがっていらしたにもかかわらず、エレベーターのボタンを押して差し上げることもせず・・・失礼しました。

何年も勉強させていただいておりながら「自立」や、「依存」と「協力依頼」との関係性は？について、未だに正しく答えることが出来ませんでした。

真の自立とは＝、私の答えは「依存しないこと。自分の人生に責任を取ること」でした。私は「恥を知れ！」と言われたバカな経営者です。
自分の力で何とかするんだ！ 頼るやつはダメなんだ！というレベルで捉えていました。

「依存」と「協力依頼」との関係性は？

私の答えは、「依存」＝自立していない者同士の責任をなすりつけ合う関係
「協力依頼」＝自立した者同士の責任を取り合う関係 でした。

いずれも、長年勉強させていただいているにもかかわらず、一般的な捉え方にとどまっている。と思われました。

現在、自分は日々の業務についても社員にあれこれと指示を出しています。ご講義のあと、それが「依存」なのか「協力依頼」なのか、を考えながら仕事をしてみましたが、どうもこれは「自立しろ！俺が楽になる！」で自分が楽になるからだと思いき、がっかりしました。
「ありがとう！」「助かった！」を繰り返し繰り返し口にしています。

父の同級生の方から、お姉様の相続対策について相談を受け、出口戦略実践研究会で知り合った行政書士の佐藤先生のお申し出に甘えて協力を依頼しましたが、これが「依存」なのか「協力依頼」なのか、自分に問いかけています。「依存」を出さず、「協力依頼」にしていかなければ、と思っています。

メモ：責任を取る気ですか？
その方の代理人(家族)という意識ですか？

【講義内容に関して】の質問をさせていただきます。

質問（問題）の要点

高い思想での「真の自立」の説明について、自身の受け止めが間違っていないか、確認させてください。

①の質問（問題）の背景を具体的に

日本語としてはわかるが、あちこちに、なぜその言葉なのか？？と思わされる箇所があり、わかりませんでした。思考してみると、こうかな？と思える状態になりましたが、その理解が正しいかどうか、確認させてください。

あなたのお考え（思想的振り返り…学んだ内容と照らし合わせた場合、今回の質問の内容をご自身がどう受け止めているのかをご記入下さい。）

高い思想では「自立」とは、

「我」のみによる自立など存在しないことを真に知ること を言う。

つまり、自己と環境との関係性において、真の存在を認める時、自己と環境との関係が変わり、結果、支えることで支えられる環境を引き起こす。

これを思想的「自立」という。

真の存在という意味、存在するということの意味を認める時。（（ここでいう「存在」は）物理学の「存在」）とご説明頂きました。

メモ：のみ

① 「我」のみによる自立など存在しないこと

私の受け止め・・・なぜなら、「我」の存在実体は関係性だから。そこに「我」は居ない。周囲への作用、あるいは周囲からの作用によって自らの存在が証明されるにすぎない。だから自立というためには、周囲を支えることで、その反作用として自分が支えられるに過ぎないという事になる、ということ、と受け止めました。

② 真に知る

なぜ「真に」知るなのか？と疑問が湧きました。

私の受け止め・・・知る では不十分で、知るは理解にとどまるが、自己と向き合い、経験を伴う確信として知る、つまりそれが真に知ること、と受け止めました。

メモ：行動

③ 自己と環境との関係性において

なぜ「関係」ではなく「関係性」なのだろうと疑問が湧きました。

私の受け止め・・・自己の存在が在るという前提なら「関係」となるが、それは分離の考え

で、自己の存在が関係性で成り立っていると捉えた時、自己と環境は分離できず関係性の関係となる。という意味だからここは「関係性」なのだと考えました。

メモ： その通りです

④ 真の存在を認める時

なぜ単なる存在ではなく、真の存在、なのかという疑問が湧きました。

私の受け止め・・・一般的な分離思考で考えたところの「存在」ではなく、量子力学でいうところの実体のない、関係性によって存在しているに過ぎない「存在」それが、分離思考で考えた偽の存在に対する「真の存在」なのではないか、と受け止めました。

メモ： その通りです

⑤ 自己と環境との関係性が変わり

なぜ、真の存在を認めると 自己と環境の関係性が変わるのか？？という疑問が湧きました。

私の受け止め・・・関係性によってのみ存在しているのが自分だとすれば、そして魂が時間や空間を飛び越える存在だとすれば、今ここにある自己は何らかの目的のためにここに存在しているのであり、周囲の環境（社員や家族、顧客）もまた、何らかの目的によって自己との関係性をもってそこに存在している。それを認める時、自己と環境の存在に何らかの意味を見出し、偶然と思っていたものが必然に、一見関係なさそうに見えていたものが関係ありの関係だったことに気づかされる。まるでお観音様が様々な姿に変わって私にとってふさわしい姿（部下や家族や顧客）になって説法をされるように、出逢う人たち全ては関係ありの関係となる、というようなことかとイメージしましたが、まだ漠然としていて、確信できていません。

そのことに気づいたとき、おのずと自己は目的を存在価値として意識し、おのずと周囲を支えるようになるのか、と。しかし、なぜ支えるようになるのでしょうか？

⑥ 結果、支えることで支えられる環境を引き起こす。

現実をそういう関係を引き起こしていく。現実変革のことなのです、とご説明がありました。なぜ支えるようになるのか、がわかりません。

私の受け止め・・・支えることでしか支えられないと確信しているから、支えるようになる、ということでしょうか？思考力の限界を感じます・・・。

引き続き考えてみますが、もし、これらについてより詳しくご指導いただけましたら幸いです。

メモ： 違います

会社名：A
役職：マネージャー
氏名：K, S
年齢：24
性別：男性

感想文の公開：①開放可能

【高次元経営第5期4講 感想文】

第3,4講と体調がすぐれない中での、貴重な学びの場を本当にありがとうございました。第3講は6/12の急遽グループダイアログのみでしたが、代表が不在の場だからこその学び、その後の代表のお身体との向き合いと気づきの開放、そして映像での講義と私からすると3講はとてもボリュームミーというか、いつにも増して大変な指導を受けているという感覚でした。

代表が入院したという事実を受けた時の私の心の動き（この学習に対しての自分の姿勢）、自分の身体が一番身近な自己・環境であるという事実と、私自身が、色々な本を読んで東洋医学に寄っていたことから、実際に食生活への考え方が変わったことなど、振り返りを書いていました。

加えて、毎週いただくご指導の中ではこれまで全く知らなかった日本の成り立ちや、世界情勢など膨大な情報と出逢い、衝撃を受けると共に、自分の中に今も根強く残っている二項対立構造を壊してしまわなければ、正しく理解できない、到底特定することの出来ないほどの大きなものをいただき、何が正解か分からなくなり、全く整理がつかず、ドキドキワクワクすると同時に、世界・宇宙の成り立ちと自分とが一つであるということを確信する為に今後とも自己と向き合い続けたい、そんな感覚でした。

ものの1ヶ月で物事の見え方が変わり、私自身怖くになってしまうほどの情報の数々でした。一方で、それとは対照的に、目の前の仕事で自己革新ができていない自分、もっと丁寧に、もっと深く一つ一つの仕事を愉しめるはずだと思いながら、どこか安易に、役に立とうとし、努力し、中途半端になり、開き直れるわけないのに、そんな自分を正当化しようとする。嘘の充実感を自分に言い聞かせる。このような自分との向き合いの毎日でした。ただ、全て自己であるということから、仕事においても必ず変わるのだらうと、自分に期待し、成長していけると確信しています。

3講は、このような心の動きの中で感想文を出せていなかった分、4講の振り返りも収集が

つかず、また長くなってしまい恐縮ですが、振り返りを開放できる場があることに感謝し開放させていただきます。

■ 第2講で行った質問について

第2講の感想文、質問を自分自身でもう一度読み直してみました。

今になって読むと、まさしく私の中での拭えない疑問であるという事実、今読んでもそれが知りたいと思うと同時に、そんなことを考えない方が楽なのではないかと思っている自分の両方がいます。同じ会社のメンバーにふんわり話したら、皆それは問題だよね〜と認識してくれますが、最後は大企業でやっていくには仕方ないという結論になります。正しいと思います。

ただ、そのような話をした時によりある人とは話が盛り上がり関係性が深まったり、「凄いいねーそんなこと考えられて」といって距離を置かれたり、現れる相手の反応に、自分自身が寂しさを感じたり、通じ合える高揚を覚える感覚を経験してきました。

そこには、もっと食いついて欲しいという期待や、そんなこと考えない方が楽じゃんと思っている自分、自分の正解を握った上で相手に疑問を投げかける（自分は変わる気なしで相手を変えたい） 自分、など色々な自分が相手を通して見えてきます。どれも自分です。

仕事の中ではやはり「そんな訳の分からないことを考えるのは良いけど、何も変わらないのだから、仕事の時は言われたことをしっかりやってください。そんなこと考えるエネルギーがあるなら、やるべき仕事をもう一步思考し、上司の手間をかけないようにスマートに、もっと丁寧に。もっと早く。」とされているような感覚です。そして、それを愚直にできている人が評価されます。 **メモ：思想もそれを求めます**

社会人になり、その大企業の歯車として、愚直に、ミスのないよう業務に務める自分に対して、社内の一員になれている充実感を感じ、時にこの思想学習と向き合うことが自分にブレーキをかけているのでは?と錯覚に陥る事もありました。そのような自己との向き合いの中で、出逢う能力的な相手（自分）を前にして、自分の足りないところ認められない自分の問題があったから今回の質問をしたのだと分かりました。だから、大企業の問題であり、自分の問題だということです。

業務外では昇進がどうか、株価がどうか、そんなことばかり話す先輩の話を聞きながら憤りと同情を感じるところまでは冷静なのですが、A社という枠組みの、文化の、法においては彼らの方が正しい。現時点で自分よりも過去に実績を出しているから自分の上司であるという事実と共に、その「正しさ」向けられると、耐えられなくなり、同情だったものが

相手への批判に変わり、「この枠組みから抜きたい、もっと広い枠組みで仕事をしたい。」と思うこともあります。これが、自分の抱えている二項対立です。休みの日にイブニングニュースを聴き、本を読み、このままでは行けないと考え、真なる感覚を得て高揚し、少しずつ変わるきっかけを得る、しかし『仕事の現場で』を自分自身が切り離すことで、否定し、自分の矛盾に悩まされる時間がありました。

お上人様の言う「片輪でアクセル全開で、片輪でブレーキをかけている」と言う言葉は正に自分のことではないかと感じるほどです。

そのような背景の中で、私の「今の会社で辞めずに、日々感じながらやっていく」という質問・確認に関して「今の方向で間違いない」という回答をいただき、何故かわかりませんが涙が出てきました。「やっぱり」というか、厳しく優しい言葉をかけていただき、迷いが払拭されるような感覚でした。

というのも、疑問を持ちながら過ごしていくことでこれまでより深く気づいたことがありました。それは、すべての人が、私を含め、自分の正しさを持っているという事です。だから、一緒に働いているメンバーは愚直でとても良い人達です。ルールを守り、会社の為に一生懸命に働いています。ただその人の正しさ（その人の全体感）が部分である、知らない、それだけです。

※ 37 頁（米の買い占めの話）

だから、自分の正しさで批判などできるはずがないと気づきました。そういうふうになると、同時に自分の足りないところに気付かされることが沢山ありました。

業務一つ一つの「思考力」という点で、これまで何も考えてこなかった自分は学ぶことがたくさんあります。 **メモ：バンザイー**

自分の大雑把でやりっぱなしである性格や、変に完璧主義なところは仕事の中でも問題意識を感じさせられます。もっとじっくり、丁寧に、考えて仕事するように最近は行動を変えています。これまで、沢山のアウトプットを出すことに注力してきましたが、一つ一つのアウトプットの質を少しでも去年の自分よりも深いものにしていこうと、昼に 15 分仮眠を取ったり、仕事の合間に余裕を持って談笑をしたり、メールを送ろうと思った時や、決断しようと思った時にもう 5 分考えてみたりしています。

この会社には業務範囲を超えて新たな企画などを考えて持ってきて 0 を 1 にする人（新しい仕事を創造する人）は少ない（評価されにくいし、トップダウンの決定を現場に落とすことが役割だから）が、1 を 10 にも 20 にも詰める思考力は凄い人が沢山います。

ここは自分に足りないもので、それを着実に埋めていだけなのだと、そう思いました。能力主義の会社にいる事で、「この会社の枠組み」の正しさを向けられること、それが全て

のように錯覚することで苦しんできました。もちろん、そこには私の感じていたように大きな問題があり、そこから目を逸らしてはいけないと思います。

その苦しみから逃げずに向き合うことは、同時に自分の幸せ(目的)に繋がっているからです。

一方で、これまで気づいていなかったのは「この会社の枠組み・文化」とどこまでも愚直に向き合って良いのだと言うことです。代表の質問の答えを聞いて改めて気づくことが出来たのは思想学習と出逢って自己と向き合うことを教えていただけている事実、その物差しによって新しい自分を認識し、自分の間違いや狭さに気づくことができるという事実を持って、全てを受け入れ、何かを否定することも、自分の正しさを主張することも必要ない、つまりこの会社でやっていくことが大企業へのアンチテーゼたるものを醸成させる為、そういうエネルギーを蓄えて持って今後活かす為なのだとしたら、それは全く必要な事であると受けとめました。この考え方に問題がありましたら、どうぞご指導の程よろしくお願いたします。メモ: 全くもって、その通り

これまで否定したかった対象から自分の足りないものを学んでいるのだという実感を得て、この会社ではまだまだ学ぶことが沢山あると、そう思います。つまり、私はこの会社にもっと貢献できると思いました。メモ: 泣けます

私は、1年目に色々な問題解決を考えて行ってきましたが、上記したような反骨心が前提にあり、上司本位、相手本位ではないので、反応が良くないことが多かったです。逆に、心を捨てて作業をしたと感じた業務では評価されたり、褒められたりする。「自分のコントロールできないことはしないで欲しい」という上司の姿勢に憤りを感じながらもこの相反する二つを統合していくことが今の自分に求められていると感じました。

■ 世界情勢、日本神話を学ぶ中での気づき

イブニングニュースで紹介される Youtube 映像を通じて日本の神話、世界情勢を勉強させていただき、私自身と今の仕事との繋がりに気づくところがありましたので、記述させていただきます。

その前に、イブニングで日本と世界のどちらが気になるかという質問もいただいておりましたが、全て繋がっているという前提で、私は世界情勢の方により興味・関心があるように感じます。もし、力になれるのであればもっと勉強させてください。

ある動画を見た瞬間の認識は、ウクライナがアメリカからコントロールされロシアを倒そうとしている。(なぜ?) イスラエルがアメリカ、イギリスを背後にパレスチナを攻撃し、その背後にあるロシアと戦っている。(なぜ?) BRICS があるから中国はロシア側? いや、敵の敵は味方理論で根本中国もロシアも共産主義の通り独立的だろう。

岸田総理はウクライナ支援を表明し、踏み切っているけど、それはアメリカにコントロールされている今の日本なら辻褃が合う。そして、アメリカの背後にはユダヤ系の財閥、が存在しており、ブラックロックなどの3社の存在を知る。じゃあ、ラスボスはブラックロックなのかな？なるほどお、と言うようにどこまでも分離し、二項対立に落とし込み、世界の関係性を理解しようとしてきました。また、それ自体はすごく勉強になりました。

なぜなら、トランプの襲撃事件も、NISA が大暴落した瞬間も、関係ありだと思い、頭の中である種の仮説が生まれ、すぐに空売りという株式の動きや、岸田総理のブラックロック CEO との会談などの事実に到達してくる。これは、もしかしてそうなのでは？という疑問を持てるからで、ニュースなどでは報道されない裏側を少しずつ理解できるようになってきたからです。

我社の同僚にも NISA 等を活用して人生の早い段階で資産形成にエネルギーを使っている人も多いので新 NISA の件は話題になり、私自身は、そのニュースを聞いて大暴落に気づくというレベルのリテラシーしかありませんでした。

「投資」の歴史は「支援」「応援」で見返りを求めるものではなかったが、相手本位同士が関わると結果的に支援した側にもリターンが来るというようなものだったと聞いたことがあり、また思想学習では「運」の話も多くあります。そういう学びがある分、現 NISA のように自分は何もしていないのに口座を作成してそこに預けていればお金が増えるということに違和感がありました。(経済学部でファイナンスを専攻していながらそんな事を言うと笑われますが)

興味がないというのも問題なので同僚の話を聞いていると、「NISA は長期的に考える事ができる。一気に落ちたけど、ほら！すぐ戻って短期で見てもそんなに損をしていない。長期で見るとドルコスト平均法で得する。短期で考えて、メンタル的に萎えたりしている人は NISA と正しく向き合えていない。」と個人の財布の話をする人、結果個人の財布でみてトントンだとすると、じゃあ、その起伏によってお金はどこに消えたのか？何事もなかったわけがない。ブラックロックやらが暴落の間に、日本企業の株式を大量に購入したという事実を知り、その何兆のお金を得ているのだとすると失ったのは日本企業=つまり日本ということになる。

メモ：一步。踏み込む思考力

日本の会社からお金が消えた（資本主義というルールで正しく置き換えられた？ともいうのでしょうか。）つまり、日本の会社が成長しない。だから日本は成長しない。すると、会社に所属している個人の財布は潤わない。これだけ必死に働いているのに。だから個人は会社に未来が見出しにくくなり、個人での資産形成が大事だよねという思考に拍車がかかる。このように、成り立ちがわからず、知らないまま、個人の財布に囚われている一個人は、その部分最適な考え方が売国に加担し、結果自分自身の身を削っているとも知らずに

自分の会社を否定する材料を得る。

無知の罪という事を改めて自覚しました。ゲーム理論で囚人のジレンマなどの例もありますが、個人が最適解を合理的に選択することのジレンマを現代社会においても目の当たりにした一コマでした。これが近代合理主義の問題なのかと理解が深まりました。また、何故そのような社会になっているの?と疑問に思うと、失われた 30 年があり、ニクソンショック、プラザ合意といった歴史での教科書で学べなかったことを知ることになり、戦前、戦後を学ぶことにある。歴史を学ぶと現代の問題とすべて繋がっているというゾクゾクする感覚になりました。資本主義 400 年の歴史の繋がりを少しずつ知ることができ、この見えない裏側での激しい戦争はずっと続いているのだということを理解しました。

同時に徹底的に足りないと感じた事は、そのラスボスがいるという、黒幕がいるという考え方と、境界線を引いて国や対象と自分を分離していることです。アメリカがどうか、日本はどうか、ロシアがどうかでは語りきれない問題なのだと分かりました。また、人を殺して自分が優位に立つと言う考え方など罷り通るのか?人種に優劣をつける考え方?世界の富を全て奪って何がしたいのか?などその根源が自分にはないと思って分離しているから、理解できないから批判してしまうことにあります。

仕事=人生との向き合いにおいて相手を批判する正しさなど存在しないと学んだ今、自分の価値観での「正しさ」をまだまだ壊していく必要があると感じました。

世界は一つでその起源が日本、その日本人の精神ということは、つまり日本の精神は、世界の精神です。現代は物事が切り離されているように錯覚しますが、宇宙の成り立ちからして**本来は全て一つである**ということを教えていただきました。この意味をきちんと理解して、中籾を実践できる自分になるべく、自分はこの会社で仕事をしているのだらうと感じました。

■ 仕事での新たな気づき

そのように考えると、会社の問題点の裏の側面が見えてくるようになりました。

1, クリエイティブを失っている**官僚主義的な問題**。

毎日 1 時間会議し 10 数個のメトリクスを分析し、改善案を話し合う。毎日しているが、意味あるの? 結局形式化の後に形骸化し、ありきたりな解決策、イタチごっこのような対策、クリエイティブな思考は生まれてこないのでは? 誰もそれを疑わず、当たり前のようにルーチンとして行う。それも何人ものマネージャーが集まって。(大量にコストをかけて) 会

議ではマネージャーに説明責任があるから、それを迫られている人は、なるべく突っ込まれないように、無難に纏める。「突拍子もないことを言って、上司から突かれる要素を作ると、めんどくさいじゃん。」と先輩も言っていました。また、その上司もレイヤーの高いマネージャーとして私よりも遥かに大きい説明責任を持っているから仕方がないことですが、そういう「漏れなく、無難に、説明責任を果たす人」が、チャンスをもらい、上に上がっていく。

1 の裏

福岡のトップに突かれないようにする為には、A社のケアしているメトリクスをしっかり理解する、上司が求める対策をメトリクス毎の温度感も考え、全てをMAXで分析せず、その日の問題の要所を抑える、流暢に分かりやすく、せかせかした上司にも伝わるよう簡潔に説明する。上司の質問しそうな事をあらかじめ考えておくなど「孫子」が必要になってきます。福岡のトップは能力が高い人だと思います。それでいて、熱意があり、しかし、あまり型破りな新しいことはしたくない、失敗をしたく無いという性格です。それは、メトリクスの改善が評価基準だからだと思います。テストで100点を取ることが好きなのかメトリクスにも愚直です。

このような人を攻略することにおいて、自分の成長に繋がらないわけがないという側面。

私は、説明責任があることで保身に走る問題=クリエイティブなものがどんどん生まれなくなっていく問題から、そんな分析毎日やらなくていいじゃん。バカバカしい。というような上司の立場に立たない邪な考えを1ミリでも持っているからこそ、日によって分析が足りない→突っ込まれる→そこで素直に負けを認められず反発したくなる→反発の理由が相手本位でない→本当の意味で信頼されない、という事に繋がるのだと思いました。

2、マネージャーの仕事は把握して「説明すること=説明責任を果たすこと」なのではないか

という気持ちになり、そこに価値はあるのか？と考えてしまう。自分の立場でいくと部下の言うことを正しく上司に伝え、トップダウンの決定を正しく現場に落とし込む、メトリクスも同じ。いわば翻訳家だと教わり納得すると共に、それって必要？という疑問を持っていました。レイヤーが多い企業は、情報の位相差が発生するので、そのコミュニケーションに多大な労力と時間を要する。沢山の衝突を生む。それならいっそのこと権限範囲などなくしてしまえば良いのではないかと？

2 の裏

思想学習を他の人に伝えようとすることもプロセス自体は同じなのではないか？これは「対話」を学ぶ機会を与えられているのではないかと？そう捉えれば、これも価値がある。コーポレートは現場との関わりが薄く、研究者気質が多い。だとすると、説明も現場からすると分かりづらいことが多い。私たちマネージャーがそれを噛み砕いて現場に伝える必要性和、現場の声をきちんと吸い上げることで、現場とコーポレートのコミュニケーションを成立させ

メモ: それを書いて貯めていく。
貯まる! 貯まる! 貯まった! 貯まった!!
と喜ぶ。感謝する。

る役割になる。その中で衝突があるから学ぶことがあるし、人間を知れる。大きな企業が動いていく上ではレイヤーが必要なのだとするとこの役割から学べることは沢山ある。

このように、どの問題も悪ではなく、自分の成長のためにじっくり向き合うべきものであることが分かりました。

メモ: 単独の「悪」などではなく

とはいえ勤務中は、次々とやるべき事が降ってきます。何かこういうアクションをしようとワクワクしている時ほど、分離している自分は、降ってくるやるべき事にやりたいことが邪魔されるような感覚になる時もあります。

だからこれまでは、業務が降ってこない休みの日にこれからどうやっていくかを考えることがとても楽しいものでした。休みも関係なくかなり仕事の事を考えているのではないかと思います。出勤した時に負けない自分になる為の準備や、長期的な事を考えるには休日しかないと思っていました。

しかし、そもそも、そのやるべき事が降ってきた時に、やりたい事と統合できるかは自分の認識次第だということに気づきました。やるべき事をやっていた時間でやりたいことが遅れたのではなく、むしろ少し時間がズレて良いタイミングで進んでいくかもしれない。やるべき事を丁寧にやったことで、やりたいことへの協力者が増えるかもしれない。やるべき事に注力しなかったことで、やりたかったことがどれだけいいアイデアでも門前払いされるかもしれない。一人で仕事ができるという前提で生きている、分離している自分だからこそやるべき事を軽視してしまう問題に気づけました。

また、ミスをするときも同じです。「今そんなどうでも良い作業よりも、俺はこれがやりたいんだけどなあ。絶対会社のためになるのはこっちなんだけどなあ。」そう考えている時の自分は心の奥で迷いがあり、必ずと言ってよいほど生産性が下がり、会社の為にならず相手本位ではありません。何か新しい事を考え、それが楽しく・意義のあることだと思うと、通常の業務を軽視する＝自己の本質が現れる→それがミスという形で出てくる。こういう時に、自分はミスをするのだと自己分析ができました。

またミスをする、なぜミスをしたのかの分析と改善策が求められます。このような振り返りは当然必要とされていません。原因がわかればそれで良い、仕組み化してミスが起こらない仕組みを作ればそれで良い。ハウツーとしては重要です。

しかし、なんだか機械として扱われているような気がして寂しさがありました。本当はその振り返りについて人間としてもっと深堀して欲しい、上司には自分のもっと内部について尋ねてほしい、認識してほしい、そして自分の足りないところを教えてほしい。その後でじゃあ具体的にどういうアクションをするのかを考えていこうと言って欲しい、と思っています。

る自分がいます。

このようなこの会社にいることで感じる寂しさのエネルギーは、自分がマネージャーとして部下に接する時に、活用することが出来ます。今の私はそれが出来ていませんでした。上司に不満を持ちながら、同じことを部下にしている、情けなく恥ずかしいどこまでも自分よがりの自分です。リーダーである自覚をまるで持てていない自分を認識しています。

レイヤーが多い組織だからこそ、自分が上司に対して感じた寂しさは、自分の部下がそう感じているのだと教えてくれているから感じたのだと考える必要があります。そんなことにも気づけていませんでした。

だから、降ってくる業務は、上司から信頼・安心を勝ち取るチャンスが降ってきている。仕事と休みを切り離している会社だからこそ、自分は「休み」という名の「何も降ってこない時間」で自己と向き合い、長期的なことを考えることができる。それはそれで大事ですが、休みに依存せず、仕事の時間の中でやるべきことと、やりたいこと、できる事を統合する必要があります。そう考えると、意味のない他者への指摘をする必要もなく、この法の元で自分がやるべきことを強かに思考できます。

そう考えると松下幸之助の休日が 2 日は必要という言葉の意味が少しだけ理解できます。休日は平日のリカバリーだけではなく、新しいものに触れて考えて行動して、こういう事やりたい！と言うものを見つけ出す時間だということです。やってみたけど、全くお門違いだったり、今はそれどころじゃないと上司に一括されたり、上司も良いと思ってくれていたけど、周りの協力が得られなかったり、色々な壁がありますが、ただ過ごしてはそのような失敗すら得ることが出来ません。

思想学習を実業の現場で実践しないと決めている自分です。分離しているのは自分です。自分の 2 講で質問をしてから苦しかったのは、そういう自分と向き合いたくないと思っていたからです。

自己である環境は、私の自我や思惑などのようなちっぽけなことを超越して変わっていきます。2 講の感想文で記述した「嫌だと感じている人」が自ずから 8 月付で辞職されることになりました。私は、その人と向き合いきれたのかなあと今でも考えますが、徹底的に向き合っていきたいという私の意図に反して自ら会社を去ってしまいました。

また、私の上司も 8 月付で他部署に移動することになりました。2 歳上の先輩で私の上司である女性は、こんなに若いのに、能力があってコミュニケーション能力があって、マネージャーとして優秀な人がいるのかと思わされた人です。A 社の新卒で史上最速で昇進した方で

もあり、元々は大阪で、自分の彼女の上司だったという何かと縁のある方で、約半年、上司としてお世話になりました。その上司との半年間での向き合いは今回割愛しますが、その人を知ろうとする中で「自立」の復習と重なるものがありました。どれだけ能力があり、期待され、早々に昇進して役職が高い人達との出逢いがあったとしても、「自立」の意味を教えてもらえる人と出逢えていない事実と、そういう価値観を教わっていないことで潜在的に苦しんでいる事実です。

この方にはなかなか運命的な（代表から話のある少し前）タイミングで「孫子」を教えてください。ただ「孫子」をこの会社で学ぶ必要があるのだと私自身強く認識させていただきました。お世話になった部下として、いつか、伝えられることがあれば良いと思います。

やはり最後は自分で切り開くしかない事を再確認させていただけるとともに、長々と上記した自分の二項対立と今後も向き合っていく必要がある事を教えていただきました。

自分と向き合った分だけ他人を助けることができる。だからこそ、他人との縁に救われる。苦しむことを楽しめると言うか、苦しみが無いと幸せもないのは言われてみれば当たり前のことです。

そのような普遍的だが見失ってしまうものを、思想学習を通して積極的に学び、この幸せを今の現代日本に、世界に伝えられるように、引き続き精進して参ります。

「私は、欲しかったけど、我慢した(私は正しい人)」

だから、 $\updownarrow$ 正義の行動に出た

「米の買い占め!! 酷いね。恥ずかしい。残念」

しかし、 $\updownarrow$ 思い込まずに尋ねていれば

「実はいつもの 1/2」

結果、 $\downarrow$ 酷いことを

「自分の正しさ」を疑わない暴力

「言わない・無視する無責任」との関係
仕事に於いても同じ

日蓮聖人の手紙

だんの つ ぼうご へ ん じ

檀越某御返事

信仰生活と社会生活の一致を訴える

御みやづかいを法華經とおぼしめせ

『檀越某御返事』

【現代語訳】 宮仕えを、そのまま法華經への信仰生活だと思ってください
(主君に仕えることが法華經を実践することです)。

これは 1278(弘安元)年、日蓮聖人が 57 歳のときに信者の四条金吾に宛てた手紙の一節である。法華經の修行をどう考えるか、という問題について日蓮聖人の見解がうかがわれる。

金吾は北条一門の江間光時^{えまみつとき}に医術をもって仕えていた武士であるが、日蓮聖人が身延山に入山して 4 年目の 1277(建治3)^{けんじ}年、光時とのあいだに葛藤が生じた。

事の発端は、天台僧・龍象房^{りゅうざうぼう}の説法場に金吾が参じたことだった。金吾に同行した学僧が龍象房に不審点を質問したところ、龍象房は返答に詰まり閉口。このありさまを目にした金吾の同僚が金吾への妬みから光時に訴え出た。そのせいで、金吾は光時の詰問を受け、主君の指図に従うことを誓う文書(起請文^{きしょうもん})の提出を命じられたのだ。

金吾は詰問の内容が法華經や日蓮聖人の教えに反していたので、身延の日蓮聖人にその旨を報告した。すると日蓮聖人は金吾を代弁して『頼基陳状』^{よりもとちんじょう}を書きあらし、光時の詰問に反論。金吾も法華經信仰をつらぬくことを表明したため、金吾の所領は没収されてしまった。

だが、光時が病に伏したのを機に、状況が一変する。

金吾が献身的に治療を施したことで光時の態度は軟化していき、金吾の所領は返還され、主従関係ももとに戻ったのである。

ちょうどその頃、日蓮聖人はこの手紙を金吾に送ったとみられる。じつは金吾は、事前の手紙の中で、3 度目の流罪の危険性と自身の出家の希望を日蓮聖人に伝えていた。それに対し、日蓮聖人は「宮仕えを続けることが法華經の修行です」と冒頭の一文を記したのだ。

日蓮聖人によれば、われわれの一挙手一投足はすべて修行であり、法華經への信仰と唱題が矛盾なく一致することこそが法華經の修行になる。したがって、信仰生活と社会生活は切り離して考えるべきではなく、唱題を実践しながら与えられた仕事に忠実に打ち込む姿勢が大切なのだ。金吾と光時の関係が改善したのも、金吾が仕事に正しく取り組んだからにはかならないのである。

— 『日蓮と法華經』 永田美穂監修 より —

会社名：S 事務所

役職：税理士

氏名：Y

年齢：33

性別：男性

感想文の公開：①開放可能

【高次元経営第5期4講 感想文】

お世話になっております。楠本代表並びに、スタッフの皆様、大変な状況の中、今回もご講義を拝聴する機会を頂き、誠にありがとうございます。

また、長い期間、感想文を提出できずに、大変申し訳ありませんでした。徐々に任せて頂ける仕事も増え、子供も生まれ、日々の生活をこなしていく中で、べた筆耕すらなかなかできなくなり、振り返りを行うとしても、非常に浅く感じる。そのうち、自分自身を振り返ることまでを行わず、ただご講義を受講させていただくだけという、この講義を受講させていただく姿勢として、恥ずべき姿勢となっていました。本当に申し訳ありませんでした。

あまりにも長い間、感想文を提出しておらず、それに紐づき、自身の振り返りを一切できていない状態でした。その状態に、不義理というか、申し訳ないというか、後ろめたいなどという感情が、書いている今も存在しています。しかし、この状態を続けることこそが、好ましくない状態ですし、感想文自体、本来は自分や周りの環境の為に書き、自分と対話し、講義を通して出逢う自分との対話の場であるはずですので、今感じているこれらの「恥ずかしい」という感情は、今まで聞きっぱなしにして、振り返りを行っていない、自分自身に対して感じるべきものだと思います、感想文を、振り返りを行いたいと思います。

まず、今回の私の振り返りの一つ目のテーマとしては、「自立」に対する認識が低いという認識が生まれたことであると思います。

自立に関しては、

高次元経営第五期第4講座レジュメ7p

真の自立とは、支えることで多くの支えを得ること。つまり、「我」のみによる自立など、存在しないことを真に知ること。

だとを教えていただきました。

これに対して、AI の答えは、

高次元経営第五期第4講座レジュメ7p

「自立」とは、能力や経済力、身体に等に関し、他者に依存せず、行動すること

だとおっしゃっておられました。

まず、どちらの言葉を聞いても、「なるほど」と思ってしまうのが、現時点での、私の知性の低さ、振り返りの出来ていなさです。講義を耳で聞いた段階だと、支えることで支えを得ることだと思っている様な気もするし、他者に依存せずに行動することだとも思っている。

そこで、なぜそう思うのか、もう少し具体的に、自分の状況に当てはめて詳しく言語化してみました。すると、どちらも非常に低いものの見方をしているため、浅い部分で「なるほど」と思っていたことが浮き彫りになりました。

私は、祖父の事務所を承継する税理士という立場から、今の自分は、物理的にも、「我」のみによる自立は存在しないと思っています。しかし、何故そう思っているかという、「支え、支えられているから」という認識でそうなっているのではあるませんでした。祖父の事務所を承継していくということは、自分自身で一から創っているという訳ではなく、また、自分自身の創意工夫で、積極的に新たな顧客を獲得しようとしている訳でもない。つまり、自分の力で何とかしている訳ではない。その事実をもって、自分は自立が出来ていない。他者に依存していると思っている。

つまり、承継をする立場→今自分にできることは、先代の顧客との関係を結びなおすこと→しかし、それとは別に、自分自身で新しい顧客をつくっていない→自分だけでは、税理士として成り立っていない気がする→しかし、日々仕事はあり、生活をさせて頂いている→この事実をもって、「我」のみによる自立など、存在しないということに、「なるほど、そうだ」と思う。という様な思考経路である様に思います。

また、もう一方の、他者に依存せずということが自立だと思っている視点で見ると、今現在うちの妻は、出産後、専業主婦となり、家を守ってくれていますが、育児ではやはり大変な思いをしており、今でも仕事中に度々SOSが来ています。その時にはできるだけ急いで仕事を済ませ、共に子供の面倒を見ています。仕事が詰まっている時には、その旨は伝えて頑張ってもらい、帰った後に子供の面倒を見て、妻の話を聞く。その時、自分では、出来る限りの精いっぱいをやっているのですが、今回のご講義の中の、低い自立の定義を確認した時に、自分は、奥さんに「依存させている、依存されている」と心のどこかでは思っているんだなと思いました。元々、結婚を決意した時には、「信頼の関係をこの人と築きたい」と心から思い、結婚をしたにもかかわらずです。

今、妻とは仲良く暮らしてはいますが、だからこそ自分の価値観が問題だと思います。仮に関係性が悪くなった時に、「こんなにしてやったのに」という思いが芽生える恐れがある様な自分の価値観になっている。また、祖父の事務所の承継の際に抱えている価値観も、基本

メモ: いずれ「継承してやった!」となってしまう。
そこに感謝は無い。

的には表と裏をひっくり返しただけで、同じだと思います。共に、私の価値観は、「依存」がキーワードなのです。

依存とは、「何か、誰かではなく、自分」だと書かれており、自他分離だと書かれています。まさにその通りなのだと思います。自分が「我が」となっており、自他を分離して、依存しているから、その価値観でモノを見ているので、「依存なのか、協力なのか」すら正確に認識できない。ここに、大きな問題は隠れているように思います。

依存について過去のご講義を捜していると、第4期第1講のジャック・ウェルチについてのご講義で、お上人様のご講義の記載がありました。

第4期第1講 p57 (お上人様のご講義)

ビジネスにおいて最も大切なことは、徹底的に現実を現実のまま直視する姿勢である。

上手くいってない時に上手くいっている振りをすることは決して正しい処置ではない、やがてそのうちにきっと何か問題が発生する。そのうちに時間が経てば全てが好転してくれるのではないかと、安易に将来に根拠もなく期待するこれが間違いの元である。そのような他

に依存する姿勢では活路は見出せない。 というこういう表現が彼の言葉の中にありますが、これもまさに現実を直視せよと言う意味を示す言葉ですので、あえてご紹介しておこうと思います。つまり、うまく行っていない、問題がある、他に解決策は無い、その時普通の人間は何を考えるかいうと、恐ろしく怠惰なことを考えるのです。そのうちなんとかなるのではないかと、時の移りが解決してくれるのではないかと、と考えるのです。時間がたてば思わぬい助っ人が出た来ることがあるのではないかと、時間をとって、時間をキープして、時間に期待しようと、時間の流れの将来に期待しようと、何の手も打たずにそう思って、自分の気持ちを落ち着かせる人がいるのです。これが間違いなのです、そんなことあるはずが無いのです、おきてくるはずが無いのです。だからそういう人は、しょっちゅうお寺にお参りしないと気持ちが収まらなくなるのです。お寺やお宮やお墓参りばかりしている経営者がいるでしょう、この手の経営者なのです。

この文章を確認していくと、依存の本質的な問題とは、現実を見ず、思考せず、行動を起こさない、そして他者に依頼心を持つということだと思います。そして、これは正に、「自分だ」と思います。だから、まず、現実から逃げないことなのだと思います。

現実から逃げないということは、具体的には、以前、第4期の第4講 (p36) でご紹介いただいていた、ハイデガーの—100 分 de 名著— NHK 出版の中に、記載されている、

ハイデガーの考える本来性とは、こうした考えではありません。先駆的な決意性という、大変難解な概念で彼が訴えようとしているのは、きわめて単純化するなら、「自分の人生を自分の人生として引き受けよう」、ということです。「引き受ける」とは他人のせいにしないね「みんな」のせいにしないということです。「仕方なかったんだ」と言い訳しないことです。

メモ：これが、思想学習そのもの。匍匐前進みたいですが、気が付いたら違う次元に居る。

という事なのだと思います。みんなのせいにしない。仕方がなかったと言い訳をしない。以前、感想文を提出し、楠本代表からご指導いただいた、「現実の問題から逃げないこと」というのは、正にここだったんだと、やっと少しだけ意味が分かったように思います。と同時に、「現実を見ないといけないなあ」とと思っている時と比べ、「現実を直視する」というのは、非常に重い響きがあります。これを受け止め、モノを考える責任を放棄しない。日々の作業に逃げ、現実を放棄しない。日々の子育ての忙しさに逃げ、現実を放棄しない。まず、現実をちゃんと直視する。これだけでも、「キツイな」と感じる自分が存在します。まず、本当に小さな一歩の様な気がしますが、「現実をちゃんと直視します」ことを、この振り返りの場をお借りして宣言したいと思います。

メモ：小さな一歩ではありません。物凄く、大きな一歩です。

また、話が元に戻ってしまいましたが、その時には、自立に対する認識が低いことを述べなければならぬと思います。「支えることで多くの支えを得ること。つまり、『我』のみによる自立など、存在しないことを真に知ること。」という言葉の意味が、まだ全然分かっていないです。正直に書きますと、今まで、支えるということは、「いい人」に思われたいという理由でやっていると思います。妻からいい人だと思われたい。クライアントからも、いいやつだと思われたい。でも、いい人と思想的であることとは全然違う。この延長線上に、私が欲しかった信頼の関係はあるのかというと、無いのだろうなと思います。まず直視すべき現実、自分は関係性に対して、「いいやつだと思われたい」という程度の価値観しか持っていないということなのだと思います。

しかし、具体的に、ここの特定が全くできていない状態です。

再度読んで確認してみても、何か、大事なものが手からすると逃げている様な感覚であり、自分の価値観の誤りを特定しきれていない様な気がしています。

今、分かっていることは、『自分の力で何とかするんだ、それが自立なんだ』と思っていた自分と、そうではないんだと思っても、「だったとすると、何が自立なんですか？支えることで多くの支えを得ることって、どういう状態なのですか？」という問いに、真の意味で回答できない自分が、恥を知るべきだということだけです。

→メモ：これを問題意識という。人生を変えるもの、人間らしさ、大人何度も何度も感想文を書きなおしていましたが、こちらに関しては、捉え切れませんでした。引き続き、学んでいければと思いますので、ご指導いただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

そうだと思います

質問（問題）の要点

メモ：あるがままを、あるがままに観る。見たいように見ない

1. 上記の振り返りで、自分の中に「依存」という価値観があり、その価値観を持っている中で、それでも問題から逃げない。現実を直視するということだと思っているのですが、誤っている、あるいは足りていない部分はどこでしょうか。

メモ その問題は本当の問題なのか？
その問題の本質は何か？
その問題を生み出した関係性は何か？

2. 自立という価値観に関しては、今の自分の価値観が低く、今のまま頑張っても、支えることで多くの支えを得る関係にはならない。ひいては、信頼の関係をつくっていくことはできないと捉えました。「支えることで多くの支えを得ること。つまり、『我』のみによる自立など、存在しないことを真に知ること。」というときの、「支える」というのは、どういう意味なのでしょう。

メモ：思想的な意味で、思想的背景の元

①の質問（問題）の背景を具体的に

1. できるだけ丁寧に振り返ったつもりですが、何度も何度も書き直している過程で、思想に照らしているつもりで、実際には、自分で受け取りたいように受け取って、自分が反省したいように反省している可能性はあるのではないかという疑念が消えない状態です。大変お手数だとは思いますが、実際に、皆様から見ると、上記振り返りは問題がないかどうか、確認させて頂ければありがたいです。

2. に関しては、今の自分の価値観が相当低いということには気がついたのですが、では、そこから信頼の関係を創れる自分になりたいというときに、そもそも高い価値観が述べる「支える」という意味は、どの様な意味なのか、正確に捉えられていないと気がつきました。今の支えるという認識は、「相手の負担を減らす、楽にする」という程度のもとなっており、何か違うと思っています。

メモ：違います。含みますが、逆に負担を増やし、しんどくすることもある、
というか、その方が多いくらいです。勿論、それも時には含みますが

メモ
これが、これまでは無かった。
その事に問題に気付いた

あなたのお考え（思想的振り返り…学んだ内容と照らし合わせた場合、今回の質問の内容をご自身がどう受け止めているのかをご記入下さい。）

「1」 については、自立という内容について、振り返りを行い、自身の「依存」の価値観がある問題を掴めたと思いました。これ自体は、問題がないのではないのかと自分の目には見えてしまいます。そのため、間違い、抜け漏れがあれば知りたいと思っています。

「2」 「自立」に関しては、自分自身の価値観が低いことが掴めたか？と思っておりますが、真の意味での自立の、言葉の意味が全く分かっていない段階であり、ではこれからどうするのかということがまだ確定できていない状態だと思います。「支える」という言葉の意味は、少なくとも今正確に捉えておかないと、妻やクライアントとの関係をちゃんと創っていくために、非常に重要だと思います。また、質問しているものの、恐らく高次元の今までのご講義の中で、出てきている内容なのだと思いますので、改めて、過去の資料も振返っておく必要があると思います。

役職：大学院修士 2 年

氏名：A

年齢：25 歳

性別：男性

感想文の公開：①開放可能

【高次元経営第 5 期 4 講 感想文】

楠本代表、准子さん、事務局及び K アライアンスメンバーをはじめとする受講生の皆様、今回も会場でご講義を受講させていただき、誠にありがとうございました。

まもなく留学が始まることから、今回が第 5 期のご講義を直接受講させていただける最後の機会ということで、何か留学に持っていきたいという気持ちと一抹の寂しさを感じながら拝聴させていただきました。

楠本代表におかれましては、体調が心配される中、ご講義後もお話をさせていただき、心より感謝申し上げます。准子さんにも貴重なアドバイスをいただきました。素敵なお土産をいただいた思いであり、今後の課題としてまいります。

今回は“関係ありの関係”が、特に感じられた回になりました。ご講義の間に気づきをいただいた際、涙が止まらなくなったことから、その気づきを今回言語化したいと思います。

また、今回から再度、感想文を解放させていただきたく存じます。ここ 1 年程、私は感想文を皆様に開放することをしてきませんでした。彼女との関係性の中で述べたものが多かったのも、彼女のことを考えて解放を憚っていた部分があります。しかし、私自身、開放するのが怖かった。周りが成長していく中で、いつまでも変わらない私を見せられない。見せたくない。自分が認められない。正直に気負っています。

その一方で、皆様の振り返りから多くの気づきと勇気をいただきました。

そして、受け止めの姿勢にも勇気をいただきました。

一方的に学ばせていただくのではなく、“関係ありの関係”を築きたい。

1 対 1 の直線的な関係性を築くのではなく、自立したい。柔らかくて、温かくて、肩の力が抜けている、自分が変わるところを見守り、支えていただける、そんな関係を築いていきたい。

皆様の受け止めと振り返る姿勢への感謝を胸に、今回から再度共有させていただきます。

今回は、留学の準備があり、振り返りを何度かに分けて共有させていただきたく存じます。

よろしくお願いいたします。

○「自立」と「関係ありの関係」について

今回のご講義の中で最も心に残ったのは、「自立」と「関係ありの関係」に関していただいた気づきです。

第5期第3講「補講」＋「質問会」② レジюме2ページ

信頼の関係（共同体）が、これです。

質問・受け止め・正直な気づきや感想、開放
これが、信頼の関係（共同体）

自分自身が、全く知らなかった自己、受け入れがたい自己。
それを、受け容れてくれる人が居る

自分が受け容れることのできなかった「事」を
「勇気を頂きました」と言ってくれる人が居る

それは、
書いたこの人の中に、私が居る
この人は、私ではないか！？と思う

この時、感動と共に
この人と私は関係ありとなる

統合されていることを知る

目的の共有を出来る事が、共同体
目的は、自己の中に在る

自己に、正直に生きる
正直に生きると、気負わない人生となる

素直に生きる 強さ

私はずっと「共同体」の関係に憧れています。高い思想を学ばせていただく際に、心が震える瞬間が何度もあったのですが、その中に皆様の感想文を読ませていただいている時、お

話を聴いていただいている時があります。

まさにお言葉の中に在るように、自分自身が、全く知らなかった自己、受け入れがたい自己。それを、受け容れてくれる人が居ることを実感した時が、まさしくその時です。

自分以上に私の自己に共感してくれて涙を流してくれる方がいる。

自分では倫理道徳や頭の中の常識でブレーキをかけてきた、反対をされてきて言葉に出せなかった言葉を、言語化して受け容れてくださる方がいる。

それをあるがままに私の一部、人間の一部として受け容れてくださる。それが本当に、ただ嬉しかったんです。同時に、年齢にかかわらず人間らしく成長され、支えあっていらっしゃる方々の姿を拝見して、かっこいい、まぶしいと思った。だから、「私ももっと人間になりたい」と思っていました。

そのような皆様に憧れ、そして「自分らしく生きたい」という自己を信じて、Kアライアンスメンバーへの参加を希望していた次第です。なかなか言い出せませんでした。多少なりとも勇気をもって発言したつもりでした。

しかし、今回のご講義で、愕然としたことがあります。

第5期第4講 レジュメ4ページ 楠本代表のお言葉 筆耕

「自立もできていないのに、共同体に入れてください」というのは、それは自我なのです。そんなに甘くないのです。優しさと厳しさが統合されていますから、自立することについては全力で応援するけれども甘やかすということとは違うのです。自立して、お互いが相互互換の関係になるから、信頼できる共同体なのです。

この言葉を伺ったとき、頭がガーンとなり、冷や汗が出てきました。

自立の意味も分かっていなかった私が、そのように願うのはもしかすると「自我」だったのかもしれない、ということに気づくと、「なんと浅はかだったのか！！」と恥ずかしさが津波のように襲ってきたのです。

“自分の力で何とかする” “頼るやつはダメ!!” 本当にそう思っていたんです。

高い思想を学ばせていただく場に引き付けて申し上げると、Kアライアンスメンバーの募集があった際にすぐに言えなかったのは、「私自身が、目的や自己を特定してからではないといけない」など、ずっと本気で、本気で思っていました。それができないのは間違いないけれども、その思いがある、それを“助けてほしい”ということで希望をさせていただいて

いたのです。が、根本から全く違ったことが衝撃でした。自己との対話は必要であると考えています。しかし、“自分の力で何とかする”“頼るやつがダメ!!”という自分、“誰か、何かを支える自己”ではなく“助けて貰おう”としていた自分以外は認められなかった。それを疑わず、疑わないからこそ、いつまで経ってもそれを手放せない、孤独な私が居ました。

そして、それは彼女との関係性においても多くの問題を引き起こしていたのです。自立の意味をはき違えて、“自分で力で何とかする”ことを是として彼女と接してきました。例えば、公認会計士試験の準備中に私が配慮だと思っていたことが逆に彼女を寂しくさせていたり、私が忙しい時も一人でこもりきる、思想学習も彼女に話す前にもっと自分で学ばなければと思って共有しないなど、枚挙にいとまがありません。本当に「自他分離」以外の何物でもありません。彼女に「なんでもっと私と向き合ってくれないの?」と言われても、ポカンと何もわかっていませんでした。「たまたま都合がよかったから付き合っ、今も都合の良いように相手を付き合わせている。」皆様の振り返りからこの気づきをいただいていたのに、ずっと知らず知らずの間に続けていたのです。

周囲と深い関係性を築き、自分らしく生きていきたい。昨年までの振り返りを通してそのことを強く感じていたことから、今年1月のフォーラムでご講演を拝聴してからは、「**楽う**」と「**人と本気で向き合う**」ことを今年のテーマとしてきました。しかし、だからこそ、彼女との向き合いを通して、また、皆様の振り返りを拝読・拝聴することを通して、「**いかに人と向き合えていないか**」を痛感した1年でした。本当に共感して人の話を聴けていない。いや、聴こうと思っていない。そもそも、自分の価値観に疑いを持っていない。

そのことに気づくと、自分に、彼女に、また一緒に学ばせていただく方への申し訳なさが襲ってきました。謝りたい、という想いと同時に、今までいただいた気づきの意図とそこに向き合われた方への感謝が湧いてきました。

第5期第4講 レジюме 38 ページ 7～12 行目 お上人様の筆耕+楠本代表の筆耕

価値創造の為の生き方は、そういう生き方しか他に方法はありません。

価値観の勉強をして頂いて、良いお友達を創り、

これは今ここにいる方のことです。感想文を読んで感動して「本当にありがとうございます」と感謝している感想文があるではないですか。それは「関係ありの関係」でその人はもう他人と思えないでしょう。他人ではないからなのです。

そして、良いお友達を良いお友達に紹介出来る素晴らしい関係性の世界が広がっているの

です。

(中略)

我々がお互いに自分だけの世界に留まれば、自己人格に出会ったということにはなりません。他人と自分との関係性をより好ましいものに仕掛けてつくり直すことが私たちには期待されているテーマになっているのです。

私たちにお上人様が期待されているテーマがこれだというのだから、その通りにすればいいじゃないですか。

ご講義の後半までの中で、思想を通じた「関係ありの関係」が今回は多くお話されていたことからその関係にますます憧れると同時に、先ほど挙げた申し訳なさと感謝が大きくなっていきました。

そこで上記の筆耕のところを拝聴した際に、私は無意識の内に「関係ありの関係」を築いてこなかったことに気づきました。というのも、学びや気づきをいただくにもかかわらず、私は感想文を開放もしていないし、感謝も伝えてきませんでした。心の中ではずっと思っていたにもかかわらずです。

そのことに気づいた瞬間、無性に感謝を伝えたくなったのです。きちんと旅立つ前に直接お礼を申し上げたい。沢山の気づきを皆様から頂いた中で、涙ながらにフォーラムで話して下さり、それに私が感動し、私が今年のテーマにした「人と本気で向き合う」。この気づきをいただいた秋山さんに、最後の補講が終わるまでの間にお礼を伝えさせていただきました。

これまで何度か挨拶程度のお話をさせていただいたほどしか繋がりがなかったので躊躇いもありましたし、私はただ感謝を伝えるとやったことをしたことがないので、話しかけるまでに時間がかかってしまいました。しかし、いざ話しかけると秋山さんは唐突のことであつたにもかかわらず、優しく涙目になりながら話を聴いてくださいました。

感謝を伝え、少しお話をし、「今後も一緒に学ばせてください」とお伝えして失礼した後も、大変不思議な感覚でした。色々と躊躇いながらも自然とそうしていたこと、そして席に帰って補講が始まってから涙が止まらなかったことが不思議な体験だったのですが、さらに不思議なことに後になってその意味が分かったのです。

第5期第4講 レジュメ 41、42 ページ6行目～ お上人様の筆耕+楠本代表の筆耕

■「関係性」とは、優しさを求めた人間がたどり着くテーマ

(中略)

関係性というのは、そういう優しさを求めた人間がたどり着く「これが私たちの安心できる条件なのだ」自分が「幸せだな」とか、「生きていて良かったな」とか、「こんな若い人たちの為に自分はお役に立てるのだ」とか、思えるように本当になるのです。

(中略)

そういうことの問題について、問題意識を持っていなかったことを振り返って、「自分は馬鹿だな」と気付けることの価値。自分は「馬鹿だなー」と思えることの価値ですよ。「馬鹿だ」というのは価値なのです。この価値は、非常に我々には重要なものだろうと思います。

上記の部分、特に、

「馬鹿だ」というのは価値なのです。

という部分を伺った際に、途端に「私は関係性づくりが分からない」という言葉が降りてきたのでメモを残すと、さらに涙が溢れ出てきたのです。

“自分が頑張らねば” “自分の力で何とかしなければ” とずっと頑張ってきた。思想を学ぶにも、彼女・家族・友人など周囲の関係性に関しても、「まず自分で、自分で」と思ってやってきて、ずっと苦しかった。でも、それは、ただ自分で頑張っていただけだった。

幼いころから故郷では勉強ができた。相手より物を知っている・考えていると思い、見下してきた。勉強で勝てない時は、運動もできることを武器にして、見下してきた。それでも敵わない相手には、自分には共感力があるといって、見下してきた。

そして、高い思想を知識・教養として学び、自分の価値観で人を判断して見下してきた。

そうやって、不安から身を守ってきた。強がって、強がって生きてきた。

一方で、その生き方に、言葉にならない不安を抱えながら。

こう強がって生きてきたのですが、ここに来て、それは「私は関係性づくりや人との向き合い方が分からなかった」んだ。向き合いたいと思っても、『分からない』と言えない自我から目を逸らしていたんだ。私は、本当に人と向き合いたかったんだ。」とスッと入ってきました。そうすると、本当に肩の荷が下りたような気持になりました。

涙が止めど無く零れたのは、今まで知らなかった自己を受け入れた安心から涙の堰が切れたのだと思います。

そして、そのように今まで接してきた方々に再度申し訳なさを感じました。でも、今までと違う申し訳なさといいますか、変に気を張らなくてよい、自分が心から謝れる申し訳なさです。と同時に、感謝を受け容れてくださった秋山さんへの感謝と、最後の最後行動できた、「関係ありの関係」を心から求めている自己への感謝及びその自己が居てくれたことへの

安心を感じました。

沢山の気づきを皆様から頂いており、本当に有難い限りです。今後も感謝を感じ、伝えられるようになっていきたいです。准子さんにアドバイスをいただいた、柔らかくて、温かくて、肩の力が抜けている、自分が変わるところを見守り、支えていただける、そんな関係を少しでも多くの方と築いていけたらと思います。

○留学の目標について

最後に留学の目標について、述べさせていただきたいと思います。

講義の中で「承継」や「継承」が重要になってくると、代表からのお話がありました。我が国の継承を行っていくことで世界への貢献となる、と代表が仰ったときに「それは私だ」と躊躇いなく思いました。

先月の間に縁のある全国の場所を巡る機会があって、日本の伝統や美に心を打たれ、「やっぱり日本人でよかったなあ」と確信しております。まだまだ日本について、知らないことがたくさんあるのですが、今回はその「日本」を語れるようになる一つの機会にしたい。そして、世界の文化を吸収し、これも語れるようにしてくる。

今まで、私は自分のために“共同体に入れてほしい”と言っていましたが、目となり、耳となる。どんな生き方の工夫が必要なのか、テーマを提言できるようになるために、思想で学んだことを今度こそ確認・実践しながら、もっと学んでくる。この方法でしか、今は皆様に貢献できません。

「**我が国の継承**を行っていくために**日本と世界で貢献すること**」は自分のやりたいことに近いのかもしれないと考えています。それをはっきりさせることも目標の一つとしたいと考えています。

今回の振り返りは以上になります。

危険に注意を払いつつ、無事に、お土産を持って帰ってきます。

自立した人間になりたいです。今後ともなにとぞ、よろしくお願いいたします。

① 質問（問題）の要点

1. 感想文を開放する意図についての確認
2. 留学の目的

② ①の質問（問題）の背景を具体的に

1. 本文で述べたように、私は「関係ありの関係」を心から望んでいると気づきました。そして、ご講義の後に准子さんに言っていただいた、「自分が変わるところを見守り、支えていただける、円が広がっていつて周りを包み込むような関係」がまさしく、目指したい関係でした。私は自立ができていないからこそ、そのような関係性を今から、築いていきたい。そのためにはどうしようかと考えたときに、感想文を開放しようと考えました。私の受け止めと行動が間違っていないか、教えていただきたいです。 **メモ：間違っていない。**

2. 留学に旅立つうえで、テーマをもっていきたいと考えています。今回のご講義を伺って、以前までの考えに加えて新たな気づきがあり、代表に確認させていただいて、安心して臨みたいと考えました。

③ あなたのお考え（思想的振り返り…学んだ内容と照らし合わせた場合、今回の質問の内容をご自身がどう受け止めているのかをご記入下さい。）

1. 私は、この1年間で少し、感想文を開放してきませんでした。

その背景には、自分なりの彼女への配慮等もあったのですが、私自身、開放するのが怖かった。周りが成長していく中で、いつまでも変わらない私を見せられない。見せたくない。自分が認められない。正直に気負っています。

一方で、皆様の振り返りから多くの気づきと勇気をいただきました。そして、受け止めの姿勢にも勇気をいただきました。一方的に学ばせていただくのではなく、“関係ありの関係”を築きたい。1対1の直線的な関係性を築くのではなく、自立したい。柔らかくて、温かくて、肩の力が抜けている、自分が変わるところを見守り、支えていただける、そんな関係を築いていきたい。准子さんに言語化していただいたような関係が素敵だなと素直に思う自分を信じたいです。

そのために、「関係ありの関係」を築くべく、感想文を開放したいと考えています。そのような想いで、開放させていただいてもよろしいでしょうか。また、素直にお礼を言えるようになりたいと思っています。この、私の受け止めについて確認させていただきたいです。

メモ：全く間違っていない。

2. 「日本を継承し、世界へ貢献する」のは「私」のことを言っている、とご講義の間に感じました。

「日本」を語れるようになりたい。「日本」を知るために、世界全体のことを知りたい。多様な価値観に触れて文化を吸収してきたい。高い思想を学ぶ中での気づきを基に、多様な経験をし、振り返りをもって皆様に還元する。今までは共同体は“私のために”入れてほしいでしたが、皆様を私もしていただいているようにお支えしたいし、その方法しか、今は貢献できません。

また、将来「平和な世の中創りに貢献し、周囲と深い関係性を築きながら、自分らしい人生を送る」という目的(?)を求め続けていますが、まだそこまでの具体的な道を見つけていません。それを日本という土地を離れながらも求め続ける。それも目標の一つにしたいです。

私のこの受け止めを確認させていただきたいです。よろしくお願いいたします。

メモ:

素晴らしいと思います。

正に、心が洗われる思いです。

勇気を頂きました。